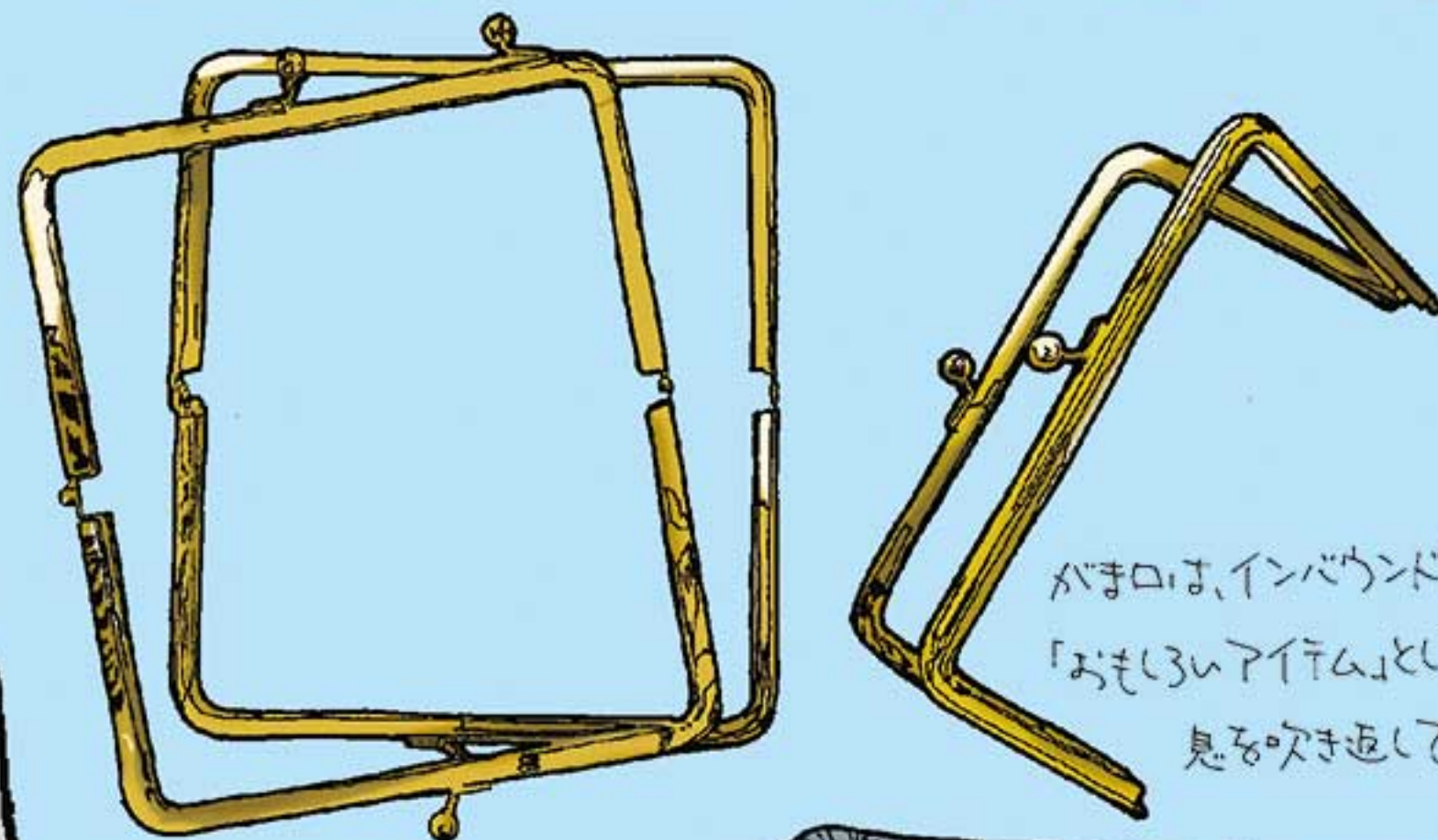


株式会社三陽金属

海外製の安い口金も出回っていますが、うちが作る口金は金属のつるつるとした輝き、色の発色、内側の金属のくすみやびびび、まったく違います。

がま口は、インバウンド観光客や若者に「おもしろアイテム」として注目され、息を吹き返してきました。



完成品イメージ
毎5分1口金に14個のパーツを
組み立てる。



「失敗してもいいから、やってみよう」という会社じゃなければ、人は高たない。そのためには、会社として余裕がないとダメなんです。うちの会社は、もらうものはもらう、値切りは一切しない。それだけのものを作っているという「ものづくりのプライド」です。口金業界は儲かるぞ!と、次々といろんな業者が流入してきたけれど、大きな会社ができ、単価が下がり、すると廃業する会社も増えていったんです。単価を下げることで、この業界の未来はなくなってしまうんです。



代表取締役
高山正市さん

最初は家業を継ぐつもりはなかったんですわ。手は汚れるし、3Kのイメージやし、家内工業でコツコツやっているのを見て、僕には無理やと…。世の中はバブル期で、友人たちはみんな営業の仕事に就いてましたわ。でも、バブルなんて長く続くわけない、考えてみれば、ほかの人が嫌がるなら希少な仕事なのかもしれん。技術を身に付け、手に職をもっていたほうがなんとか、食べていけるかもしれん。そう思って、この世界に飛び込みました。

がま口製造は下請けですから、安い値段で作れと言われることが多いんです。が、数年前から、単価はいっさい値切らない。こちらが提示する金額でのみ取引してもらっています。値切ることをしては、この仕事はいずれなくなってしまう。生き残るには、新しいことにチャレンジする余裕が必要だし、従業員がきちんと食べていけることも大事。何より、きちんと値段を提示できるだけの価値の高い仕事をしていると自負しています。

口金業界も、中国産の安いものが出回った時がありました。似せた形はつくれるけれど、やっぱりええもんはマネるだけではだめなんです。口金のええもんとは、見た目のきれいさはもちろん、開け閉めがしやすく、丈夫なこと。突起部分の玉の、微妙なからみ具合を調整するのは、機械ではできひんと思います。それでも、完璧なものは一生できないですわ。手でする仕事ですからね。だからこそ、一生をかけて完璧なものを追求するのが、ものづくりの醍醐味やと思っています。

口金のきれいさを開け閉めのしやすさを完璧なものを一生かけて追及する

金属加工からめっきまで一貫生産 がま口の口金を作る製造会社

小銭入れ、ポーチ、バッグ、ペンケース、傘入れ…。がま口を使ったアイテムは様々ある。人によっては、がま口と聞けば懐かしい印象を持つこともあるだろう。実は今、外国人観光客や若者にレトロモダンな雰囲気が集めている。三陽金属はがま口の口金、つまりパチンと開け閉めする金属の部分を1970年の創業当時から製造している。ファスナーの普及で、一時は衰退産業とされていたこともあったが、前述のように人気が再燃。同社の製造も、フル稼働で行っても2カ月、3カ月待ちという状況になっている。

口金は鉄の線材を切断してみぞを作り、曲げて、2つのパーツの端をかしめ、玉をつけ、めっきで表面を加工して仕上げる。そのすべての作業を、同社は一貫生産している。もともと、口金は分業制で行われていたが、同社は「自らが納得できる商品を製造する」ことをモットーにしているため、めっき工場まで開設。めっきを自社にかかえることで、納期短縮に加え、希望どおりの色合いを作りだすことができる。すべての作業を人の手で行い、最初から最後まで一貫生産体制を可能にした。従業員は全部で12人。すべての作業を知らない、ものづくりの楽しさが分からないと、従業員はすべての作業に精通。金型はどうやって作るのか、どうやって金属が曲がるのか、めっきはどうするのか。1、2年かけてひと通りを経験する。

「月3,000個の注文だったのが、急に1万個になったこともありましたが、目先の利益に飛びついたらあかん。うちは大量生産ではなく、小ロットで品質重視に徹しました」と高山社長は話す。クオリティの高さが評判を集め、どこにもないオリジナル口金の注文なども多い。

どんなものを入れるのか、完成形をイメージしてサイズを決め、使いやすさ、見た目の良さを考えて口金のデザインを企画。専門メーカーだからそのノウハウをもとに、新しいもの、今までにないものを作り出す。手作業なので、100個程度の小さなオーダーにも対応する。市場が求めるニーズをとらえ、徹底した品質へのこだわりのもと、ものづくりへの誇りをもって取り組む。それが、口金業界をけん引する同社の姿勢だと言える。

株式会社三陽金属

<http://kuchigane.com/>
〒544-0012 大阪市生野区巽西2-1-44
TEL 06-6757-6306 FAX 06-6757-3813
事業内容 / がま口の口金の企画・製造



製造部長
高山秀峰さん

小さい頃は、父から継がなくてもいいと言われていたので、継ぐつもりはなかったんです。飲食店をやりたいと思ってたので、学校を出てからは焼き肉屋に勤務。

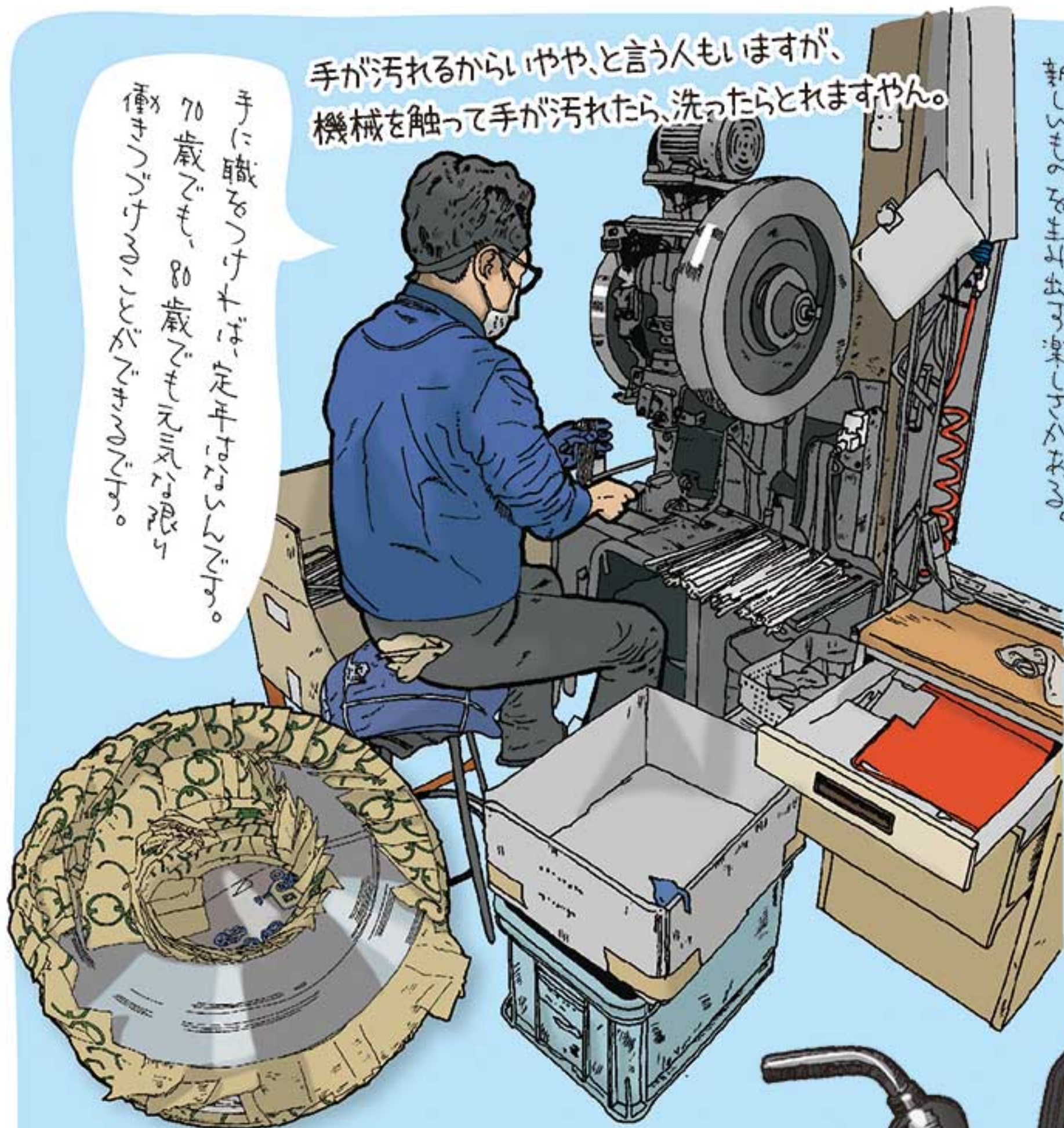
でも、このままでもいいかと考えた時、会社勤めよりも、技術を磨いたほうがいいのかなと思いました。実際、やってみるとおもしろいと思いました。「おんは、すごい」って。大学出たわけでもないのに、自分が知らないことを知っている。作り方や磨き方など、やってみながら技術を蓄積。

教えてもらってできる仕事ではないんです。鉄には、波があるんです。技術は、自分で見て、さわって、やってみるしかありません。失敗も多いですが、なんとか出来上がった時の満足感はたまりません。その積み重ねが自分の財産になるんや、と思います。

小銭入れだけじゃなくて、傘入れとか、ペンケースとか、いろんな形の口金を作っています。おまけに、おまけの口金も作っています。

手が汚れるからいやや、と言う人もいますが、機械を触って手が汚れたら、洗ったらとれますやん。

手に職を身につけて、定年退職まで働きたい。70歳でも、80歳でも元気な人になりたい。



丸い玉がすべりやすいので、一番使いやすいと思います。最近では、奇抜な形の口金もありますが、見た目はよくても長く使っていると開け閉めの時に手が痛くなることも。

我が社の 自慢

「大阪ものづくり 優良企業賞」を受賞

大阪府は、高度な技術力や高品質・低コスト・短納期などを誇るものづくり中小企業に対し、「大阪ものづくり優良企業賞」として表彰。同社は、長年培った技術力や品質へのこだわりが評価され、2017年度の大阪ものづくり優良企業賞を受賞した。



口金は、もともと分業制だった。がまぐる屋とは、パーツごとに納品されたものを形にするのが仕事。でも、うちが形を作ったから、玉づけまですべてできる。